

北海道アイヌの葬送用広紐に関する基礎的検討

—製作技術の地域差と日高東部地域における東方系・西方系出自集団との関係—

大坂 拓

目次 はじめに

- 1 先行研究の到達点と課題
 - 2 分析の方法
 - 3 分類の提示
 - 4 分布の検討
 - 5 コレクター収集資料の評価事例
- おわりに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、葬送用広紐 (Rope for tying dead)、出自集団 (Descent group)

はじめに

本稿では、アイヌ民族が葬送儀礼に使用する紐類のひとつである葬送用広紐⁽¹⁾を取り上げ、製作技術による分類を示したうえで、各分類群と出自集団との関係を検討する。また付加的な成果として、分析結果を基礎として博物館収蔵資料に含まれる個人コレクター旧蔵資料を検討すると、背景情報が欠如した資料群についても、収集地に一定の推測を加えることが可能になることを指摘する。

本稿で葬送用広紐と呼称するのは、シナノキ (*Tilia japonica*) やエゾイラクサ (*Urtica platyphylla*)、ツルウメモドキ (*Celastrus orbiculatus*) の繊維⁽²⁾を素材とする10本前後の紐を編んで作られたもので、幅約2~4 cm、全長約3~5.5mに達し、遺体を包んだ莫蔭の結束、遺体を運搬する際の担ぎ棒への吊り下げに使用される。日高東部地域では、黒色に染色した紐を2~3本混ぜたものと無染色の紐のみで編まれたものの二本を一組とした事例が多く(図1:1)、染色したものを混ぜたものを女性に見立てmatneay、無染色のものを男性に見立てpinneayと呼び、遺体包装時にどちらの紐を上にするかが被葬者の性別によって異なるとされている(表3:14)。近年では葬送儀礼で使用されることは稀になって

いるものの、胆振・日高地方を中心に、家庭で保持されている事例も少なくない。

既に先行研究によって、葬送儀礼に用いる紐には本稿で論じる「葬送用広紐」と、白糸2本と黒糸2本の4本編みで作られた「葬送用細紐」⁽³⁾(図1:2)の2種があることが知られており、それぞれの使用方法についても詳細な記述がなされている。このような中で筆者があらためて一種を取り上げて検討を加えることは、従来の記述に屋上屋を架すものとする向きがあるかもしれない。

しかし、従来の記述は日高地方の限られた地域を対象にしたものに限られ、技術的なバリエーションに関する言及もなされていないため、同様の紐がその他の地域でも普遍的に用いられたのか、形態に地域差が存在するのかといった基礎的な問題についても、これまでほとんど注意が向けられてこなかったと言っている。

20世紀後半に日高東部地域の新ひだか町静内で記録された民族誌記述として、sumunkurと呼ばれる西方系出自集団とmenasunkurと呼ばれる東方系出自集団では葬送用広紐の編み方が異なるという報告がなされているのだが、残された資料によってこうした情報を裏付ける作業も、現在まで全く手つかずのままとなっている。

議論が進展してこなかった背景には、アイヌ民具全体について繰り返し言われてきたように、背景情報が乏し

大坂 拓:北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

- (1) 従来は「遺体包装紐」といった名称も使用されてきたが、実際には莫蔭に包んだ遺体の運搬にも使用されるため、本稿では「葬送用広紐」と呼称する。
- (2) 靱皮繊維の同定に関する客観的分析方法の確立は今後の課題である。本稿でも資料の素材について肉眼観察の所見を記している部分があるものの、その判断に依拠した議論を行うことは避けることとする。
- (3) 従来は「墓標巻き紐」といった名称も使用されてきたが、実際には副葬用食器や水桶の結束、遺体包装の一部など、葬儀に関わる広範な用途に使用され、墓標に巻き付けるのは幅広い機能の一部に過ぎないことから、本稿では葬送用細紐と呼称する。



1 葬送用広紐（新ひだか町アイヌ民俗資料館 10314）



2 葬送用細紐（新ひだか町アイヌ民俗資料館 10338）

図1 葬送用の紐類

い資料が大半で詳細な地域差や年代差の追及が困難という漠然としたイメージがあったこともさることながら、観察する側が民具の製作技術に十分な理解が及んでいなかったために、資料の間に存在する差異に気づくことができなかつたという側面も否定できないだろう。筆者は本稿で復元製作に基づいた製作技術論的視点を導入することによって、技術的な地域差を見出すことが可能なることを示したい。

1 先行研究の到達点と課題

(1) 名取武光の研究

名取は「北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説」（名取1972）で葬送儀礼具について解説する中で、葬送用の紐類を「細編紐（ウトキアツ）」と「太編紐（ムリリ）」に分け、「細編紐」は4本編みで、遺体の包装や墓標の装飾、副葬品の結束に用いるとし、「太編紐」は8本編みで「遺体包装にも」用いるとした。また、「ウトキアツとムリリは、用途も似ている所から、同一に呼ばれる場合もあるが、よく聞きただしてみると、一般に細いほうをウトキアツ、太いほうをムリリと呼ぶ（日高）と云ふ」（名取前掲：77）としている。

以上の名取の記述は、葬送用の紐類に4本編みと8本

編みの二種があり、機能は一部重複し、名称には揺れがあることを指摘したものとまとめることができる。

(2) 久保寺逸彦の研究

久保寺は、「北海道アイヌの葬制」（久保寺 1956a、b）において葬送儀礼に使用される各種の民具について紹介する中で、「細編紐utoki-at、太編紐murir、par-murir⁽⁴⁾（いずれもオヒヨウ、シナの樹皮、或はイラクサの繊維で、黑白交えて編んだ縄）」、「utoki-atもmurirも死体包装、副葬品の緊縛に用いられる。但し、墓標に巻くのはutoki-atだけ」（久保寺 1956a：13）としており、名取と同様、葬送用の紐に2種を認めたものと言える。また、名称については「平編みのutoki-at即ちpar-murirと呼ぶ綱」（久保寺 1956b：162）との記述があり、これも名取同様、揺らぎがあることを記録したものとまとめることができる。

(3) 萱野茂の研究

萱野は、アイヌ民具の記述研究を刷新した大著『アイヌの民具』において、葬送用細紐を「ウトキアツ 墓標に巻く紐」、葬送用広紐を「パラムリリ 死体を包む紐」と呼称し、前者は白糸と黒糸の4本編み、後者は10本編みで製作されるものとした（萱野 1978：313-317）。

(4) 挿図中ではpara murirと正しく記載されており、本文中の記載は誤記と見られる。以下同様。

それぞれの製作技術についても簡潔にまとめているほか、葬送用広紐は包装した遺体の運搬にも使用し（萱野前掲：308）、遺体を墳底に下したのち鎌で切断するなど（萱野前掲：309）、葬送儀礼全体の中の位置づけを見直し、製作から使用までを網羅した優れた視点を示した。

萱野の記述を名取や久保寺によるものと比較した場合、葬送用の紐に2群の存在を認める点は共通しつつ、萱野の出身地で一代前の人々を対象に調査を行った久保寺の記述などで錯綜していた名称が整理されたものと見なすことができる。もっともこのことは、名取や久保寺が記述したアイヌ語名称が誤りで萱野の記述が正しいという事を直ちに意味するものではない点は、十分に注意しておく必要があるだろう。20世紀前半にはアイヌ語母語話者によって実際に複数の名称が交錯して用いられていた可能性もまた低くはない。

また、一連の記述の中で萱野が、自身の幼少期には居住地の平取町二風谷ではすでに葬送用広紐を使用する葬儀は行われておらず、1931～1932年に日高町字庫富で僅かに見た記憶があるのみとし（萱野前掲：310）、使用方法は新ひだか町三石で聞き取ったとしている点にも（萱野前掲：313）、留意が必要となる。萱野が北海道教育委員会の委託を受けて実施していた民族調査の記録の中にも、葬送用広紐の使用方法に関する様似町での聞き取りの様子が『アイヌのくらしと言葉2』（北海道教育委員会 1991b：242-244）、浦河町での聞き取りの様子が『アイヌの暮らしと言葉3』（北海道教育委員会 1992：292-293）に納められており、『アイヌの民具』の記述がこうした日高東部の聞き取りで得られた知識、同時に収集した民具を基礎として構成されたものだった可能性を低く見積もることはできない。

(4) 課題

以上のように、先行研究では名称にはやや混乱があるものの、葬送用の紐に4本編みと8本以上で編まれた2群が存在することを共通して認めていることが分かる。ただし三者の記載した情報は日高地方に偏っていたり、情報の得られた地域が曖昧であったりし、記述された内容が北海道全域に普遍的にみられるものなのか否かという基本的な点が確認されていない。また、葬送用広紐の編みを名取は8本編みとし、萱野は10本編みとしている点は、基礎的な事実認識に食い違いがあると言えるが、その差異が地域差なのか同一地域内のバリエーションなのかといった点は全く問題にされていない。

その後、1980年代に入ると、新ひだか町静内に居住した織田ステノ（1901年生～1993年没）が、葬送用広

紐について、menasunkur「東方系出自集団」が10本編みのものを用い、sumunkur「西方系出自集団」は15本編みのものを用いると語っている（北海道教育委員会 1984：31）。これまでの民族調査事例では、日高東部地域では、menasunkurへの帰属意識を持つ人々は浦河町から静内川下流域⁽⁵⁾、sumunkurへの帰属意識を持つ人々は静内川上流域から新冠にかけて多数を占めることが明らかになっているので、『アイヌの民具』における萱野の記述が沙流川流域に当てはまるとすると、東方から順に浦河町から静内川下流にかけて10本編み、静内川上流から新冠にかけて15本編みが分布し、沙流川流域に至って再び10本編みが分布すると考えることになる。

日高東部地域ではsumunkur「西方系出自集団」はsarunkur「沙流人」と対句で用いられることもあり、墓標の型式など文化的な同一性が強いものと考えられているから、新ひだか町静内で語られた規範意識が共有されていたとすれば15本編みの分布が沙流川流域を含め広く面的に広がっていることが期待されるが、萱野の記述はそうはなっていないのである。

このような状況が生じている背景には、婚姻等による人間の移動が介在した、元来の地域差が日高東部地域で考えられている集団意識と重ならないものだった、萱野による資料収集が地域差を超えて行われたために記述に地域差が混在したなど、様々な可能性が想定される。残された資料からこの問題をどこまで整理できるのか、検討してみる必要があるだろう。

以下では、第一に対象資料を選定し、それぞれの収集の経緯について吟味し、第二に、製作技術と素材の組み合わせから分類群を設定する。第三に、各分類群の地理的分布を検討したうえで、民族誌記述と比較する。

2 分析の方法

(1) 対象資料の選定基準

対象資料は、博物館等が刊行している目録類を参照するとともに、新ひだか町アイヌ民俗資料館及び国立民族学博物館から所蔵資料データの提供を受けて簡易な一次リストを作成し、明確な背景情報を伴う資料を含む資料群を中心に調査対象リストを整えた。その後、それぞれの所蔵館で実見可能な資料を観察して結果を表計算ソフト上で入力し、全402点を対象とする属性表をまとめた（表2）。

資料が2本1組で収蔵番号が付されている場合には、任意に枝番を付して各1点として扱った。2本1組で登録

(5) この範囲は様似町まで及ぶ可能性が考えられるが、現在のところ明確な記述を見つけれられていない。

されている資料の中には、特徴が一致しないものが組み合わされた事例が含まれているが、こうしたものは収蔵に至るまでの過程の中で組み合わせが改変されている可能性が考えられる。

対象資料のうち、収集地の情報が伴うものは91点(22.6%)で、そのうち浦河町から新ひだか町静内で収集された資料が71点(78.0%)を占め、他の地域は最多でも豊浦町礼文華と洞爺湖町虻田で各5点(5.4%)と僅少である。

(2) 対象資料の概要

北大植物園・博物館所蔵資料

対象資料は12点が所蔵されており、うち6点は2本1対の状態では保管されている。その他、目録上で「死体包装紐」とされる資料が1点存在するが(10234)、実見したところ葬送用細紐だったため除外した。また、対象資料のうち1点(表3:2)は荷縄の断片である可能性が否定できないため、備考欄に記した。

加藤克が最近紹介した「029目録」では、1884(明治17)年に胆振国千歳郡で収集された資料として「モレリ/糸縄の類」と「ウトキアツ/糸縄の類」の2点が記載されており、前者が現在「1884年8月21日」に「千歳」で収集されたとの情報を伴うもの(表2:5)に対応する可能性が指摘されている(加藤 2019:13)。

名取武光が1934年にまとめた「アイヌ土俗品解説」では、「太編紐(ムリリ)」の資料点数は「二本(日高)」とされている(名取 1972:77)。これは名取自身が1933年に「[静内]中下方」で収集した資料(表2:8・9)に対応する可能性もあるが、それ以前に収集されたことが確認できる2点(表2:2・5)が数え上げられていない経緯は不明である。

市立函館博物館所蔵資料

台帳上で「背負縄」として登録されていたものを含め、馬場脩寄贈資料3点、近年寄贈された豊浦町礼文華の資料5点、その他13点の計21点を対象とした。2本1対のものはなく、いずれも1本のみとなっている。

国立民族学博物館所蔵資料

2本1対のものが1組2点、1本のみのもものが61点の計63点が登録されており、全点の調査を実施した。調査を進める中で、長さや編みが類似した資料が連番で登録されているものや、端部に結束の痕跡を留めるものが多

数確認された。これらの中には本来は2本1対だったものも含まれるものと推定される。

北海道博物館所蔵資料

対象資料は248点が所蔵されている。他に、資料番号182536が葬送用広紐の未成品として登録されているものの、端部に環が形成されていないことから葬送用広紐と考えることはできず、除外した。

詳細な背景情報を伴うものは19点で、内訳は1971年に新ひだか町東静内在住の女性⁽⁶⁾から一括して受け入れたもの16点、同年に白老町の女性から受け入れたもの1点、旧北海道開拓記念館が1980年に浦河町の浦川タレに製作を委託したもの2点である。このうち白老町の資料は収蔵中にタグが失われていたため、1969年12月に藤村久和がおこなった調査の報告(藤村 1976)に掲載された写真と照合した。

その他、背景情報が失われたものとして、近藤幸吉の旧蔵資料が対のもの47組94点、1本のみのもものが14点の計108点、田中美穂旧蔵資料が対のものが9組18点、1本のみのももの10点の計28点、小嶋慧子旧蔵資料が対のもの21組42点、1本のみのももの46点の計88点ある。

新ひだか町アイヌ民俗資料館所蔵資料

所蔵資料のうち、新ひだか町静内に居住した男性から2006年に一括して寄贈された資料46点を対象とした。内訳は2本1対のものが16組32点、1本のみのもものが14点である。寄贈者の男性は親族が浦河町にも居住していることから、資料は日高地方東部の複数の地域に由来する可能性がある。

浦河町立郷土博物館所蔵資料

所蔵資料のうち、北海道教育委員会の文化財所在調査報告(北海道教育委員会 1980)に掲載されているものとの対応関係が確認できた4点を対象とした⁽⁷⁾。いずれも1978年の博物館設置時前後に町内で収集された可能性が想定されるものの、詳細な経緯は明らかになっていない。

アイヌ民族文化財団所蔵資料

旧アイヌ民族博物館所蔵資料のうち、背景情報が明確なもの、及び推定可能なもの3点を対象とした。

(6) 2020年1月22日に、本資料収集時の担当者である藤村久和氏より、旧所蔵者は旧三石町出身であり資料もそこに由来するものである可能性が考えられることをご教示いただいた。

(7) 同報告掲載のうち608、611、612(番号重複)、613は調査時には確認できなかったため除外した。

3 分類の提示

(1) 編みの技術による分類群の設定

分類は資料の属性を幅広く扱うことが望ましいが、葬送用の紐類は固く結束されている場合が多く、結束方法そのものが民族誌的情報の一つでもあるため、解いて全長を計測するなどの方法をとることは避けなければならない。そこで本稿では次善の策ながら、編みの技法に限って以下の検討を進めることとする。

アイヌ民族の組紐製作技術については、平取町二風谷の8本編みの技法が報告されているほか（萩中・河野1967）、津田命子が復元的研究によっていくつかの事例を示している（津田2003）。

編みを構成する本数は、1本の紐を基準にした際に、再び同じ辺に現れるまでの間に何本の紐が存在するかによっても知ることができる。例えば、図2上段では①の黒紐が次に現れるまでの間に②～⑨の紐があることから、10本編みであることを知ることができる。ただし、実際の資料には編みが乱れた部分も多く、この方法のみで編みの本数を計数すると不正確になる恐れがあるし、同じ本数で異なるパターンの編みがなされる場合に区別した表記ができない点に限界がある。

そこで本稿では、編みを構成するうちの1本を取り出した場合、その他の糸とどのような関係にあるかという視点で記述を進めることとした（図2）。資料を製作者に対して縦長に配置した場合、製作者から見て右端にあたる紐を基準として取り出し、左に隣接する紐に対して、製作者の側（表）を通る「またぎ」と、製作者から見た反対側（裏）を通る「もぐり」を繰り返すことで編み進めることに着目し、その際、何本の糸をまたぐ／もぐるかを示すこととした。具体例を示せば、1本どりで2本を「またぎ」、次に2本「もぐり」の場合、[1-2/2...]と記述していくこととなる。なお、この時に製作者から見て右端の紐を、隣接する紐の前を「またぎ」で編み始めることも、背面を通し「もぐり」で編み始めることも技術的には可能であるが、実際に存在する資料では例外なく「またぎ」で始まり側面観が「Z」をなしているため、その点を区別する必要はない。

(2) 分類結果

表1に、実際に認められた全ての組み合わせと、それぞれの資料数、及び対象資料に占める比率を示した。編みの技法のバリエーションは先行研究で報告されていた

ものを大きく上回り、8本編み2種、9本編み1種、10本編み5種、11本編み2種、12本編み5種、13本編み1種、14本編み2種、15本編み2種の計20種に達し、他に不規則な編みが4例認められた。

以下では、編みの技術を表1に示した細分によって「10本編みb」などと呼称し、図中では必要に応じて「10b」のように略記することとする⁽⁸⁾。図3に代表的な事例を示した。

(8) なお、本稿で示す編みの分類及び分類名称は、アイヌ民族の組紐の技術を総体的に記述することを目指したのではなく、単に本稿の対象資料を記述する便宜のためのものである。そのため、例えば荷物の縄部などには本稿の表1に含まれない編みのパターンが確認できるものもある（大坂2018a：表4）。この点に十分注意していただきたい。

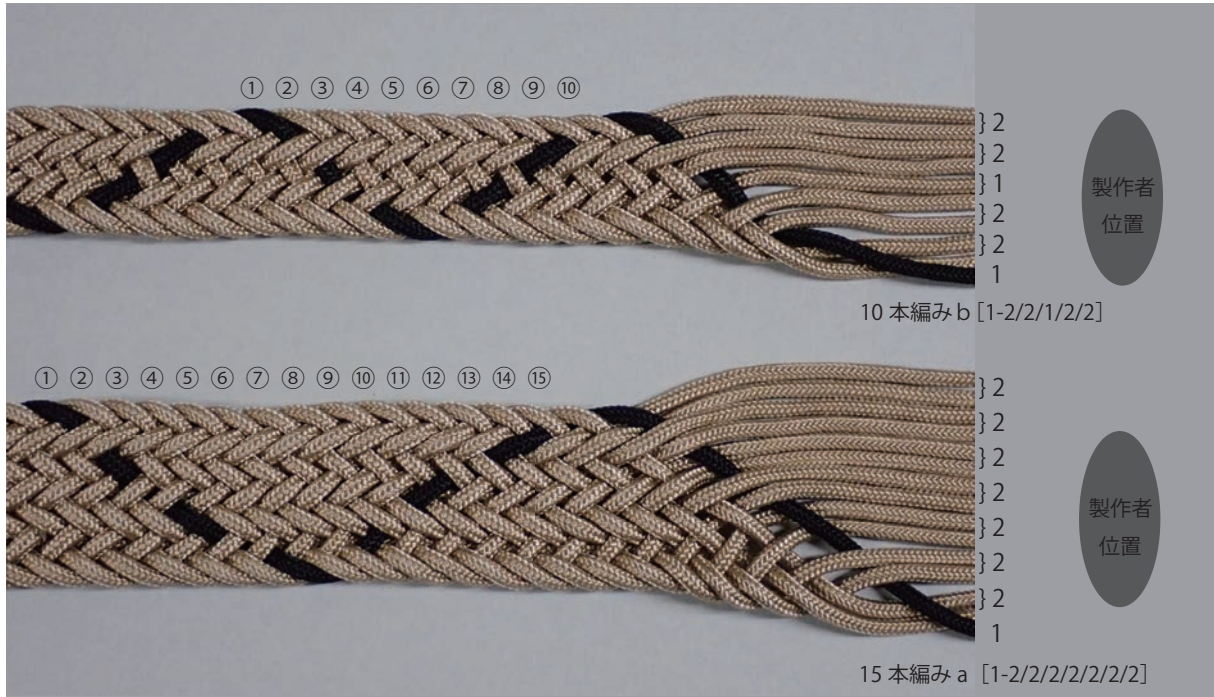


図2 編みの技法の記述方法 (筆者製作：説明の便宜のため基準に黒紐を使用)



1 10本編み b (北大植物園・博物館 10455)



2 15本編み a (アイヌ民族文化財団 62049)



3 12本編み d (北大植物園・博物館 10237)



4 12本編み e (北海道博物館 22183)



7 11本編み a (市立函館博物館 民族 998)



8 不整 [1-2/3/1/1/2] (新ひだか町アイヌ民俗資料館 10378)

図3 編みの技法

表1 編みの分類と各タイプの資料数及び対象資料に占める比率

大別	細別	編みの組み合わせ	資料数	比率
8本編み	a	[1-1/2/1/2/1]	1	0.2%
	b	[1-2/3/2]	3	0.7%
9本編み		[1-2/4/2]	1	0.2%
10本編み	a	[1-1/2/3/2/1]	16	4.0%
	b	[1-2/2/1/2/2]	257	64.1%
	c	[1-2/1/1/1/1/2]	11	2.7%
	d	[1-3/1/1/3]	9	2.2%
	e	[1-1/1/1/1/1/1/1/1]	13	3.2%
11本編み	a	[1-2/2/2/2/2]	10	2.5%
	b	[1-1/1/1/2/1/1/1/1]	2	0.5%
12本編み	a	[1-1/2/5/2/1]	1	0.2%
	b	[1-2/2/1/1/2/2]	7	1.7%
	c	[1-2/1/1/1/1/1/2]	1	0.2%
	d	[1-2/2/3/2/2]	17	4.2%
	e	[1-3/2/1/2/3]	1	0.2%
13本編み		[1-3/2/2/2/3]	2	0.5%
14本編み	a	[1-2/2/1/2/2/2]	2	0.5%
	b	[1-2/1/1/3/1/1/2]	2	0.5%
15本編み	a	[1-2/2/2/2/2/2]	41	10.2%
	b	[1-2/1/1/4/1/1/2]	1	0.2%
その他 (不整)			4	1.0%

表2 資料の属性一覧表

	収蔵機関	収集者	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年		
1	北大植物園・博物館		105							
2				10232	石狩				明治期	
3				10235						
4				10236						
5				10237	千歳				1884年	
6				10238						
7				10239						
8				10454	新ひだか町静内			K.K	1933年	
9				10455	新ひだか町静内			K.K	1933年	
10				10643						
11				10644						
12				10988						
13	市立函館博物館		民族997							
14			民族998							
15			民族999							
16			民族1000							
17			民族1001							
18			民族1002							
19			民族1003							
20			民族1004							
21			民族1005							
22			民族1006							
23			民族1007							
24			民族1009							
25			民族1010							
26			民族1013	洞爺湖町虹田					1930～1940年代	1971年
27			民族1014	洞爺湖町虹田					1930～1940年代	1971年
28			民族1015	洞爺湖町虹田					1930～1940年代	1971年
29			H29-0053	豊浦町礼文華				N.I		2017年
30			H29-0054	豊浦町礼文華				N.I		2017年
31			H29-0055	豊浦町礼文華				N.I		2017年
32			H29-0056	豊浦町礼文華				N.I		2017年
33			H29-0057	豊浦町礼文華				N.I		2017年
34			国立民族学博物館	小林 啓三	H0017048	登別市	金成 モナシノク		1935年	1975年
35					H0017049	登別市	金成 モナシノク		1935年	1975年
36					H0037481-1	平取町二風谷			寛野 茂	
37	H0037481-2	平取町二風谷					寛野 茂		1978年	
38	H0062051								1978年	
39	H0224243	平取町二風谷					貝澤 守幸		2001年	
40	H0224244	平取町二風谷					貝澤 守幸		2001年	
41	K0005185								1975年	
42	K0005186								1975年	
43	H0003178								1976年	
44	H0003179								1976年	
45	H0003180								1976年	
46	H0003181								1976年	
47	H0003182								1976年	
48	H0003183								1976年	
49	H0003184								1976年	
50	H0003185								1976年	
51	H0003186								1976年	
52	H0003187							1976年		
53	H0003188							1976年		
54	H0003189							1976年		
55	H0003190							1976年		
56	H0003191							1976年		
57	H0003192							1976年		
58	H0003193							1976年		
59	H0003194							1976年		
60	H0003195							1976年		
61	H0003196							1976年		
62	H0003197							1976年		
63	H0003198							1976年		
64	H0003199							1976年		
65	H0003200							1976年		
66	H0003201							1976年		
67	H0003202							1976年		
68	H0003203							1976年		
69	H0003204							1976年		
70	H0003205							1976年		
71	H0003206							1976年		
72	H0003207							1976年		
73	H0065064							1970年-1978年		
74	H0065065							1970年-1978年		
75	H0065066							1970年-1978年		
76	H0065067						1970年-1978年			
77	H0065068						1970年-1978年			
78	H0065069						1970年-1978年			
79	H0065070						1970年-1978年			
80	H0065071						1970年-1978年			
81	H0065072						1970年-1978年			
82	H0065073						1970年-1978年			
83	H0065074						1970年-1978年			
84	H0065075						1970年-1978年			
85	H0065076						1970年-1978年			
86	H0065077						1970年-1978年			
87	H0065078						1970年-1978年			
88	H0065079						1970年-1978年			
89	H0065080						1970年-1978年			
90	H0065081						1970年-1978年			
91	H0065082						1970年-1978年			
92	H0065083						1970年-1978年			
93	H0065084						1970年-1978年			
94	H0065085						1970年-1978年			
95	H0065086						1970年-1978年			
96	H0065087						1970年-1978年			

収蔵機関	収集者	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年
		11287					1970年
		22183 ♪	白老町		T.A		1980年
		23357-1	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23357-2	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23358-1	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23358-2	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23359-1	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23359-2	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23360-1	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23360-2	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23361-1	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23361-2	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23362-1	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23362-2	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23363-1	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23363-2	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23364	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		23365	新ひだか町東静内		T.T		1971年
		27133-1			N.Gマンロー	～1942年	1971年
		27133-2			N.Gマンロー	～1942年	1971年
		72133-7-1	浦河町	浦河タレ			1980年
		72133-7-2	浦河町	浦河タレ			1980年
		180067			久保寺造彦		2019年
		180068			久保寺造彦		2019年
		22778-1					1971年
		22778-2					1971年
		22779-1					1971年
		22779-2					1971年
		22780-1					1971年
		22780-2					1971年
		22781-1					1971年
		22781-2					1971年
		22782-1					1971年
		22782-2					1971年
		22783-1					1971年
		22783-2					1971年
		22784-1					1971年
		22784-2					1971年
		22785-1					1971年
		22785-2					1971年
		22786-1					1971年
		22786-2					1971年
		22787-1					1971年
		22787-2					1971年
		22788-1					1971年
		22788-2					1971年
		22789-1					1971年
		22789-2					1971年
		22790-1					1971年
		22790-2					1971年
		22791-1					1971年
		22791-2					1971年
		22792-1					1971年
		22792-2					1971年
		22793-1					1971年
		22793-2					1971年
		22794-1					1971年
		22794-2					1971年
		22795-1					1971年
		22795-2					1971年
		22796-1					1971年
		22796-2					1971年
		22797-1					1971年
		22797-2					1971年
	近藤幸吉	22798-1					1971年
		22798-2					1971年
		22799-1					1971年
		22799-2					1971年
		22800-1					1971年
		22800-2					1971年
		22801-1					1971年
		22801-2					1971年
		22802-1					1971年
		22802-2					1971年
		22803-1					1971年
		22803-2					1971年
		22804-1					1971年
		22804-2					1971年
		22805-1					1971年
		22805-2					1971年
		22806-1					1971年
		22806-2					1971年
		22807-1					1971年
		22807-2					1971年
		22808-1					1971年
		22808-2					1971年
		22809-1					1971年
		22809-2					1971年
		22810-1					1971年
		22810-2					1971年
		22811-1					1971年
		22811-2					1971年
		22812-1					1971年
		22812-2					1971年
		22813-1					1971年
		22813-2					1971年
		22814-1					1971年
		22814-2					1971年
		22815-1					1971年
		22815-2					1971年
		22816-1					1971年
		22816-2					1971年
		22817-1					1971年

	収蔵機関	収集者	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年
200	北海道博物館	近藤幸吉	22817-2					1971年
201			22818-1					1971年
202			22818-2					1971年
203			22819-1					1971年
204			22819-2					1971年
205			22820-1					1971年
206			22820-2					1971年
207			22821-1					1971年
208			22821-2					1971年
209			22822-1					1971年
210			22822-2					1971年
211			22823-1					1971年
212			22823-2					1971年
213			22824-1					1971年
214			22824-2					1971年
215			22825					1971年
216			22826					1971年
217			22827					1971年
218			22828					1971年
219			22829					1971年
220			22830					1971年
221			22831					1971年
222			22832					1971年
223			22833					1971年
224			22834					1971年
225			22835					1971年
226			22836					1971年
227			22837					1971年
228		22838					1971年	
229		33084-1	田中美穂					1972年
230		33084-2						1972年
231		33085-1						1972年
232		33085-2						1972年
233		33086-1						1972年
234		33086-2						1972年
235		33087-1						1972年
236		33087-2						1972年
237		33088-1						1972年
238		33088-2						1972年
239		33089-1						1972年
240		33089-2						1972年
241		33090-1						1972年
242		33090-2						1972年
243		33091-1						1972年
244		33091-2						1972年
245		33092-1						1972年
246		33092-2						1972年
247		33093-1						1972年
248		33093-2						1972年
249		33094-1						1972年
250		33094-2						1972年
251		33095						1972年
252		33096						1972年
253		33097						1972年
254		33098						1972年
255		33099						1972年
256		33100						1972年
257		182442-1	小嶋慧子					2017年
258		182442-2						2017年
259		182443-1						2017年
260		182443-2						2017年
261		182444-1						2017年
262		182444-2						2017年
263		182445-1						2017年
264		182445-2						2017年
265		182446-1						2017年
266		182446-2						2017年
267		182447-1						2017年
268		182447-2						2017年
269		182448-1						2017年
270		182448-2						2017年
271		182449-1						2017年
272		182449-2						2017年
273		182450-1						2017年
274		182450-2						2017年
275		182451-1						2017年
276		182451-2						2017年
277		182452-1						2017年
278		182452-2						2017年
279		182453-1						2017年
280		182453-2						2017年
281		182454-1						2017年
282		182454-2						2017年
283		182455-1						2017年
284		182455-2						2017年
285		182456-1						2017年
286		182456-2						2017年
287		182457-1						2017年
288		182457-2						2017年
289		182458-1						2017年
290		182458-2						2017年
291		182459-1						2017年
292		182459-2						2017年
293		182460-1						2017年
294		182460-2						2017年
295		182461-1						2017年
296		182461-2						2017年
297		182462-1						2017年
298		182462-2						2017年
299		182491						2017年

	収蔵機関	収集者	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年
300	北海道博物館	小嶋慧子	182492					2017年
301			182493					2017年
302			182494					2017年
303			182495					2017年
304			182496					2017年
305			182497					2017年
306			182498					2017年
307			182499					2017年
308			182500					2017年
309			182501					2017年
310			182502					2017年
311			182503					2017年
312			182504					2017年
313			182505					2017年
314			182506					2017年
315			182507					2017年
316			182508					2017年
317			182509					2017年
318			182510					2017年
319			182511					2017年
320			182512					2017年
321			182513					2017年
322			182514					2017年
323			182515					2017年
324			182516					2017年
325			182517					2017年
326			182518					2017年
327			182519					2017年
328			182520					2017年
329			182521					2017年
330			182522					2017年
331			182523					2017年
332			182524					2017年
333			182525					2017年
334	182526					2017年		
335	182527					2017年		
336	182528					2017年		
337	182529					2017年		
338	182530					2017年		
339	182531					2017年		
340	182532					2017年		
341	182533					2017年		
342	182534					2017年		
343	182535					2017年		
344	182537					2017年		
345	小樽市総合博物館		3682	新ひだか町三石				1971年
346			3685	新ひだか町三石				1971年
347			31-1	新ひだか町三石				1971年
348			33-1	新ひだか町三石				1971年
349			34	新ひだか町三石				1971年

	収蔵機関	収集者	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年
350	新ひだか町アイヌ民俗資料館		10313-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
351			10313-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
352			10314-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
353			10314-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
354			10315-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
355			10315-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
356			10356-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
357			10356-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
358			10357-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
359			10357-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
360			10358-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
361			10358-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
362			10359-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
363			10359-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
364			10360-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
365			10360-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
366			10361-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
367			10361-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
368			10362-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
369			10362-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
370			10363-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
371			10363-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
372			10364-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
373			10364-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
374			10365-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
375			10365-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
376			10366-1	新ひだか町静内		U.T		2006年
377			10366-2	新ひだか町静内		U.T		2006年
378			10367 (1) -1	新ひだか町静内		U.T		2006年
379			10367 (1) -2	新ひだか町静内		U.T		2006年
380			10367 (2) -1	新ひだか町静内		U.T		2006年
381			10367 (2) -2	新ひだか町静内		U.T		2006年
382			10368	新ひだか町静内		U.T		2006年
383			10369	新ひだか町静内		U.T		2006年
384			10370	新ひだか町静内		U.T		2006年
385	10371	新ひだか町静内		U.T		2006年		
386	10372	新ひだか町静内		U.T		2006年		
387	10373	新ひだか町静内		U.T		2006年		
388	10374	新ひだか町静内		U.T		2006年		
389	10375	新ひだか町静内		U.T		2006年		
390	10376	新ひだか町静内		U.T		2006年		
391	10377	新ひだか町静内		U.T		2006年		
392	10378	新ひだか町静内		U.T		2006年		
393	10379	新ひだか町静内		U.T		2006年		
394	10380	新ひだか町静内		U.T		2006年		
395	10419	新ひだか町静内		U.T		2006年		
396	浦河町立郷土博物館	607						
397		609						
398		612-1						
399		612-2						
400	アイヌ民族文化財団	児玉作左衛門	62049	新冠町		N.N		1964年
401		亮昌寺	72100	洞爺湖町虻田周辺カ				
402			72101	洞爺湖町虻田周辺カ				

4 分布の検討

(1) 分布図の作成

前節で確認した編みのタイプの相互関係を検討するために、背景情報を有する資料91点を対象として分布図を作成した(図4)。一見して明らかなように、資料は北海道内に広く分布しているわけではなく、胆振・日高を中心とする狭い範囲に集中しており、その中でも地域的な偏りが存在する。

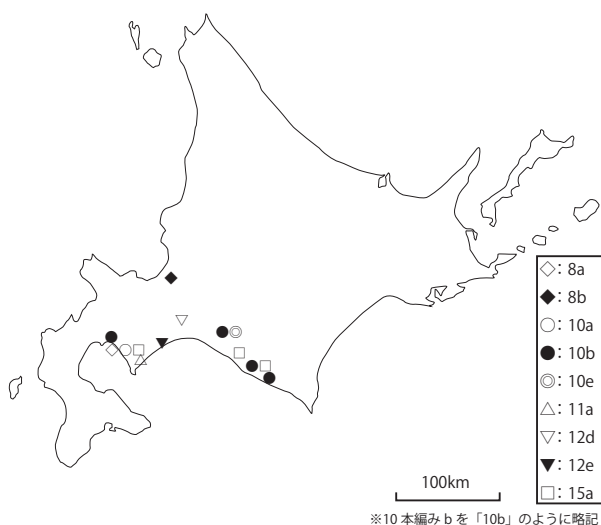


図4 背景情報を有する資料の分布

(2) 各地域における分類群の組成

地域単位に編みのタイプの組成を検討すると(図5)、日高東部地域の浦河町から新ひだか町静内で収集された資料では、10本編みbが71点中66点(93.0%)を占め、その変形と見られる不整([1-2/3/1/1/2])の1点を加えると94.3%に達する。また、その他の資料は15本編みaが2点(2.8%)、8本編みbが2点(2.8%)と極めて少ない。このうち8本編みは、葬送用具一式の一つとして1980年に依託製作されたもので、他の資料に比べて際立って小型である。この地域に8本編みの資料が存在したと見なすよりは、標本・模型として製作されたために簡略化されたものと見るのが適切だろう。以上の点から、日高地方東部は10本編みbが卓越し、少量の15本編みaが伴う地域とまとめることができる。

隣接する新冠町では、資料数は1点のみながら15本編みaが分布しており、日高東部地域に少数含まれる資料との連続性がある。しかし、そこから西の千歳市、白老町、登別市では11本編みと12本編みが分布しており、

全く傾向が異なる。

新冠町と千歳市に位置する平取町では、10本編みbが2点、10本編みeが2点の異なるタイプが併存しているが、これは隣接地域で収集された資料とは大きく異なっており、むしろ日高地方東部に近い。この点は、観光地として活発な活動を行っている当該地域に異なる地域から民具類が流入していたことも考えられるほか、そうして流入した民具類を参考に新たに製作されたものである可能性も否定できない。より古い年代にこの地域で収集され、現在は海外に所在する資料の詳細な調査が実施されるまでは、この地域に関する評価は保留しておくほかないだろう⁽⁹⁾。

(3) menasunkur/sumunkurとの関係

本稿1(4)で述べたように、新ひだか町静内の織田ステノは、日高東部地域ではmenasunkur「東方系出自集団」が10本編みのものを用い、sumunkur「西方系出自集団」は15本編みのものを用いると語っている。この地域では、静内川下流から浦河町にかけてmenasunkur(東方系出自集団)に属する人々が多数を占め、稀にsumunkur(西方系出自集団)に属する人々が含まれるとされている(大坂2018b:68-71)。

本稿で取り扱った日高東部地域の資料は、浦河町から新ひだか町東静内で収集されたものと、静内川下流域に居住し、浦河町に親族が居住する男性が所有したものからなっており、menasunkurと結びつくことされる10本編みが圧倒的多数を占める状況は、民族誌記述と整合的な結果と見なして良い。加えて、従来「10本編み」であることだけが知られていたものが、実際に製作・使用されていたものは10本編みbにほぼ限られ、極めて高い同一性を示すことも明らかになった。僅かに混在する15本編みaは、同地域に居住するsumunkurに属する人物の為に用意されていたものと考えられる。

西の胆振東部地域には、日高東部地域には存在しない8本編み、11本編み、12本編みなどの多様なタイプが混在しており、日高東部地域でそれぞれの系統を特徴づけると考えられている形態が共有される範囲がそこまで及んでいないことは確実視できる。先行研究の中には、menasunkur/sumunkurを全道を二分する大集団と捉え、様々な文化的要素の境界が静内川周辺に位置すると見る見解もあったが(更科1977)、葬送用広紐に関する限り、日高東部地域で認められた規範意識はさほど遠くまで広がっていない。

以下は全くの推測だが、日高東部地域では静内川周辺

(9) アメリカ合衆国ブルックリン美術館所蔵の、1904年に平取町で収集された資料(TBM12486)は、写真で見ると、11本編みaのように見え、それが正しいとすれば千歳市収集資料と共通することになるが、写真のみでは厳密な判断は困難である。本資料の存在については古原敏弘氏のご教示を受けた。その他に、ロシア民族学博物館にも7点の資料が収蔵されているもの(荻原他編2007:340)、写真からは編みは判別できない。

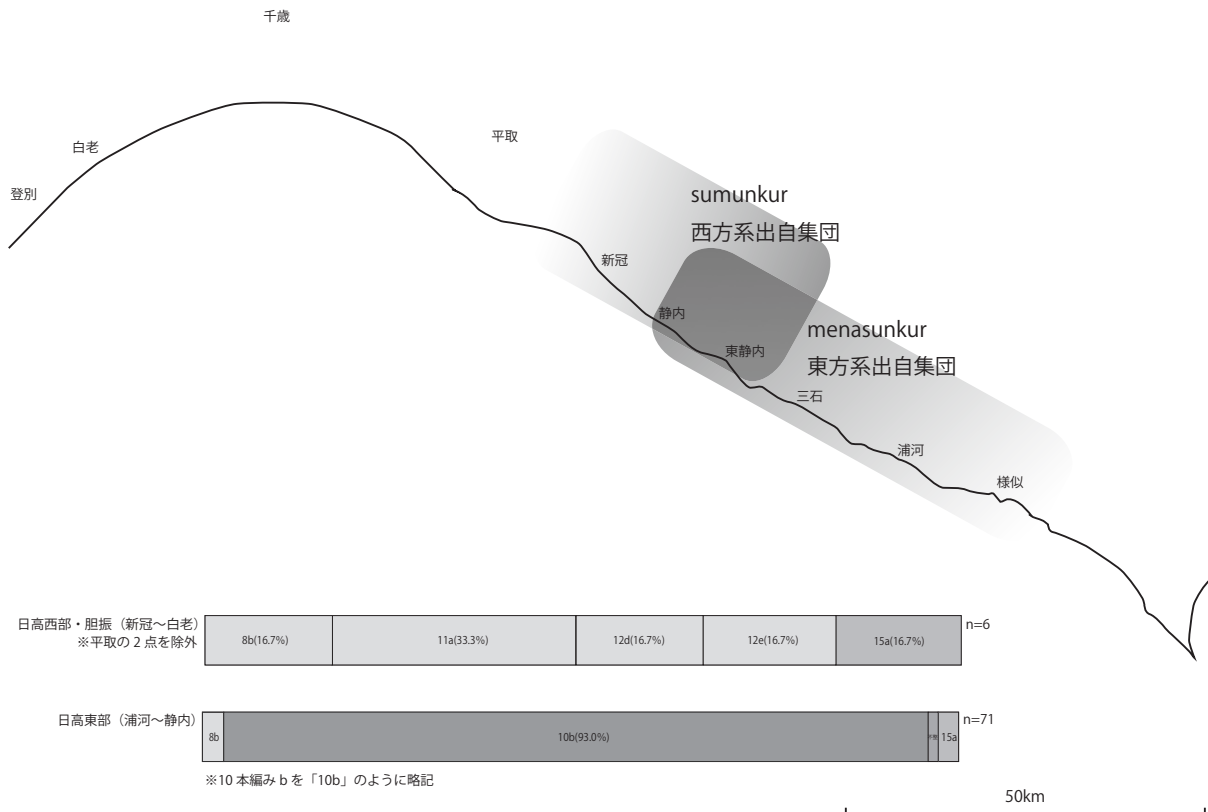


図5 西方系／東方系出自集団の領域と各地域の葬送用広紐の組成

を境界としてmenasunkur／sumunkurという二つの父系／母系出自集団が長期間にわたって併存する中で、それぞれの出自集団に固有の定型的な葬送儀礼具が成立し、維持されてきたのではないだろうか。

一方、胆振地方の西端に近い洞爺湖町虻田では、8本、10本、12本、15本を用いる各種の編みが混在しており、強い斉一性を見出すことが難しい。こうした状況は、日高東部地域で見られたような父系／母系集団に基づく明確な規範意識が存在しなかったか、日高東部地域のような二大集団とは異なる、より小さな父系／母系集団を単位とする違いが存在したことを反映したものと考えられる。二つの解釈を絞り込むに足る民族誌情報は得られていないが、少なくとも、日高東部地域とは大きく異なる様相が存在したことは確かである。

(4) 空白域の状況

分布図上には、渡島半島から北海道北部・東部に広大な空白域が存在している。この空白域はアイヌ民族の人口が胆振・日高に比べると少なく収集された民具資料そのものが非常に少ないが、更科源蔵による記録によれば、遺体を包んだゴザを串で留め串の上を紐で巻きとめるという方法そのものは多くの地域で共通していたことが確認できる (表3: 2～5)。ただし、そこで用いられた紐

の形態は7本編み (表3: 7) や、丸い (表3: 22) とされ、北海道南西部とは大きく異なるものだったようだ。十勝地方の帯広市伏古や本別町では木綿布を用いて結束したとする事例がある (表3: 16・24)。こうした、他の用途と区別が困難な縄や臨機的に木綿布を裂いて使用するなど、定型性の低い形態をとったことが、資料として収集される機会の少なさに結び付いた可能性があるだろう。

表3 葬送用広紐に関連する民族誌記述

更科源蔵『コタン探訪帖』				
番号	巻号一頁	地域	調査年月日	
1	1-23	美幌	25.10.15	ムリリ あみなワ
2	4-19	斜里朱円	26.4.18	[紐を使用する遺体包装の模式図]
3	4-22	標茶虹別	26.4.21	[紐を使用する遺体包装の模式図]
4	4-31	本別	26.5.16	[紐を使用する遺体包装の模式図]
5	4-56	標津	26.5.22	死体はキナで包みイラクサの縄でしばった
6	7-36	穂別	28.2.1	yattuy 屍体を包むキナ/muriri 屍体をしばる縄 白と黒/utokiya クワに巻く縄 科又ハオヒョウの皮を沼に入れて黒くする
7	8-12	塘路	28.5.21	葬式/屍体を包むのもオブネキナの敷物しないのを使う/ponkutは七本であむ/[紐 を使用する遺体包装の模式図/結束紐の位置にponkutの注記]
8	8-71	新冠	28.6.29	muririは白と黒があり
9	8-83	新冠	28.6.30	muririは白ばかりと黒まじりとあり、頭の方にさす棒はsiripa usipeといひ、saranbe をつけ [紐を使用する遺体包装の紙製模型が挟み込まれている]
10	8-134	音更	28.7.9	muririは白と黒との布でしはかける
11	12-108	虻田	35.10.3	キナは重ねて合せず両方を合せにわとこ (osupara-ni) の串でとち科皮の縄 (ciret nausiki※) をかける。男は右を上にし、女は左を上にかける [紐を使用する遺体包装 の模式図]
12	18-93	白老	38.4.11	muririは科皮でつくり白一色/utoki atは科皮かhay (白と黒)
13	18-118	常呂 (樺太)	38.7.20	[紐を使用する遺体包装の紙製模型が挟み込まれている]
北海道教育委員会『アイヌのくらしと言葉』				
番号	巻号一頁	地域	調査年度	
14	2-121	静内農屋	1990年	murir黒いやつはいつたやつは、matneay、白ばかりのはpinneayって、違うの。だ から男の時は黒、下にして、上に白いやつ、どこまんでも、頭から、足まで、白、上 なるようにして編んで行くの。で、女の時は、白下にして黒、上なるように、足ま んで、編んでいくの。
北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財調査報告書』				
番号	巻号一頁	地域	調査年度	
15	III-31	静内農屋	1983年	スムンクルは十五本、メナシウンクルは十本のムリルカで編んだ。
16	VII-100	本別	1987年	死体をキナに入れ、めどのついた木の針で、左前にしたゴザを刺して留める。そのめ どにさらしを通して編んで行く。
17	X-56	千歳ウサクマイ	1990年	otはyattuyでくるんで、kemを使わず、ごぎに木を刺して、utokiatでとめる。これを 棺におさめた。そのころ、もう棺があった。困った人はいれなかったけれど。それか ら、ツルウメモドキの皮の色を抜いてkaekaした糸に色のついたぎれ (黒) を混ぜて 編んだ縄 (murirという) で棺を縛って棒に通し、担いで墓場へ運ぶ。これらの紐、 縄はばあさんがたくさん作っておき、持っていない人にやったり、貸したりする。
18	XVIII-220	屈斜路	1998年	棺にtarを2本通して、その紐に棒を通して二人で担ぐ。
北海道開拓記念館『民族調査報告書資料篇』				
番号	巻号一頁	地域	調査年度	
19	I-8	サハリン恵須取	1969年	この串にイラクサの白糸ばかりで編んだ紐をかける。この紐をクンキウコユポカとい う。紐のかけ方は、両端から中央へとかけていく。包装が終わるとハイによりをかけた もので太く編んだボロカを肩、胴、足の3ヶ所にかけ、これに棒を通して墓地へ遺 体を運んでいく。
20	III-19	網走市	1971年	ガマ製のキナに遺体を包み、死体包装紐ととめ串で結束していく
21	III-27	斜里町	1970年	死装束をした死者は模様のつかないキナに包み、トドの木質部を削って作った長さ13 cm、幅2cm位のとめ串を20本 (大人の場合) 刺してキナをとめ、そのとめ串にシナの 内皮で作った幅2cmほどの包装紐をかける。
22	III-36	斜里町	1970年	このとめ串にオヒョウの繊維で断面を丸くあんだ細長い紐をかけてゆく。これはとて も難しいものなのでかけかたは記憶していない。また、紐はオヒョウの繊維だけで あり、黒布、黒糸、染色したオヒョウ皮を入れて編むことはなかった。
23	III-37	斜里町	1970年	包装された遺体の肩と膝かぶの2ヶ所に太い綱をかけ、この太い綱に死体かつぎ棒を 入れて二人がかつぐ。この太い綱にも黒い糸、布は入っていない。
財団法人アイヌ民族博物館『山川弘の伝承』				
番号	頁	地域	調査年度	
24	46	帯広市	1986年	キナは長く作ってあるのでそこに遺体を置き、足のほうと頭のほうから内側へ折る。 それから左右の両側を真ん中へたむように折り曲げ、ソコンニの串で2ヶ所を斜め に刺し止めて紐でしばる。(中略) そして、串が抜けないように白い布で縛る。(中略) こうした包みが出来上がると、タルや布で2ヶ所を輪状に縛り、これに担ぐための棒 を通す。

※cirepna-oskep (三つ編み) を聞き間違えたものではないか。縄の名称ではない。

5 コレクター収集資料の評価事例

北海道博物館が所蔵する近藤幸吉収集資料（表2：121-228）は、詳細な収集時の記録が付属していないものの、従来はいくつかの断片的な情報によって浦河町で収集されたものと考えられてきた経緯がある（出利葉 1997：47）。

近藤の収集資料108点には、確かに10本編みbが69点（63.9%）、15本編みaが12点（11.1%）含まれており、これらの資料が浦河町やその周辺で収集された可能性はある。しかし、日高東部地域で収集されたことが確実な資料には全く含まれていない12～14本編みも13点（12.0%）と少なくないことから、全てが浦河町周辺で収集されたものとするのは困難と言わざるを得ない。収集地域は日高から胆振を含む広い範囲に及んでいた可能性を考えるべきだろう。また、2本1組の資料の中には相互に異なる技法で編まれたものが組み合っている事例が14例と多いことも、アイヌ民族から直接収集された資料にはほとんど認められない特徴である。収蔵に至る過程で、編みの違いを区別できない人物によって資料本来の組み合わせが乱されている可能性を想定しておく必要がある。

筆者はこれまで、他種の民具の検討に際し、近藤の収集資料には日高東部から胆振に至る幅広い範囲で収集されたものが、組み合わせの再構成なども含みながら混在している可能性を想定しておく必要があるものと考えて資料を取り扱ってきたが（大坂 2018a：47）、本稿の分析結果もこれを支持する。

さいごに

本稿では、葬送用広紐の編みの技法を分類し、その地域差について確認した。結論をまとめると以下のようになる

- (1) 葬送用広紐には20種を超える編みのバリエーションが存在する。
- (2) 日高地方東部では10本編みbが卓越し、15本編みaが僅かに伴う。これは前者がmenasunkur、後者がsumunkurによって使用されるとする民族誌記述と整合する。
- (3) 胆振地方の千歳・白老・登別には、11本編みと12本編みの資料が分布する。これは日高地方東部でsumunkurが使用するとされる15本編みaの分布が胆振東部には及んでいないことを示す。
- (4) 北海道北部・東部の空白域でも遺体包装の結束が行われていたことは疑いないものの、資料が収集されなかった背景には、人口の少なさに加え、他の用

途と区別が困難な縄や、臨機的に木綿布を裂いて使用するなど、定型性の低い形態をとったことに由来する可能性がある。

- (5) 本稿の分析結果を援用することで、収集地の情報が失われたコレクター収集資料について、おおよその収集地を推定することが可能になる場合がある。

はじめにも述べたように、葬送用の紐類は2000年代に入って大量に寄贈された事例もあり、地域によっては現在でも相当量がアイヌ民族の家庭で保持されている。今後も各地で新たな資料が知られるようになる可能性は十分にあり、本稿で現在までに知られている資料によって構築したフレームを基礎として、見直しを続けていく必要がある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、古原敏弘氏、藤村久和氏よりご教示を賜ったほか、資料所蔵機関の伊藤昭和（浦河町立郷土博物館）、大矢京右（函館市教育員会）、加藤克（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）、齋藤玲子（国立民族学博物館）、菅原慶郎（小樽市総合博物館）、藪中剛司（新ひだか町博物館：調査時）の諸氏から多大なご協力を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。ただし、存在するだろう全ての誤りは筆者に帰する。

引用文献

- 大坂 拓 2017. アイヌ民族の刀帯—分類群の共時的分布と通時的分布—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要 2: 1-32.
- 大坂 拓 2018a. アイヌ民族の荷縄—地域差と年代差、及び用途による形態差に関する基礎的検討—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要 3: 19-50.
- 大坂 拓 2018b. 北海道アイヌの「死者用靴」—日高東部地域の東方系出自集団に固有の死装束とその周辺—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要 3: 51-72.
- 大矢京右 2017. 児玉コレクションの収集経過とその周辺. 市立函館博物館研究紀要 27: 1-40.
- 荻原真子・古原敏弘・ヴァレンチーナ V. ゴルパチョーヴァ編 2007. ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録. 草風館.
- 加藤 克 2008. 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について：歴史的背景を中心に. 北大植物園研究紀要 8: 35-91.
- 加藤 克 2019. HUNHM所蔵アイヌ民族資料情報の再検討を可能とする史料について. 札幌博物場研究会誌2019: 1-77.
- 萱野 茂 1978. アイヌの民具. すずさわ書店.
- 萱野 茂 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典. 三省堂.
- 萱野 茂 2000. アイヌ歳時記 二風谷のくらしと心. 平凡社.
- 久保寺逸彦 1956a. 北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として. 季刊民族学研究 20(1・2): 1-35.
- 久保寺逸彦 1956b. 北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として—続—. 季刊民族学研究 20(3・4): 54-101.

- 河野広道 1931, 墓標の型式より見たるアイヌの諸系統, 蝦夷往来. (河野広道著作集刊行会 1971, 北方文化論 河野広道著作集 I, に再録)
- 小谷凱宣・萩原真子 2004, 海外アイヌコレクション総目録 文部科学省科学研究費補助金(2001~2003年度)基盤研究(B)(2)研究成果報告書第2冊, 南山大学人類学研究所.
- 更科源蔵 1977, アイヌの神話.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2008, アイヌの工芸—ペンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラーコレクション—.
- 財団法人アイヌ民族博物館 1993, 亮昌寺資料目録.
- 田村すず子 1996, アイヌ語沙流方言辞典, 草風館.
- 津田命子 2003, アイヌの組紐—アイヌの民具に見られる組紐の組成と種類について—.
- 名取武光 1934a, アイヌ土俗品解説, ドルメン 3(4): 13-25. (1972, 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一), に再録)
- 名取武光 1934b, アイヌ土俗品解説(2), ドルメン 3(7): 59-65. (1972, 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一), に再録)
- 名取武光 1935, アイヌ土俗品解説(3), ドルメン, 3(11): 19-26. (1972, 名取武光著作集 I アイヌと考古学(一), に再録)
- 萩中美枝・河野広道 1967, —Aynuの下紐に関する覚書 I—, 北海道の文化 13.
- 藤村久和 1976, 民族調査ノート(3)白老地方の慣習, 北海道史研究2: 82-90.
- 北海道教育委員会 1977, 昭和51年度アイヌ民俗文化財調査報告書 (無形民俗文化財2).
- 北海道教育委員会 1980, 昭和54年度アイヌ民俗文化財調査報告書 (有形民俗文化財4).
- 北海道教育委員会 1983, 昭和57年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 II.
- 北海道教育委員会 1984, 昭和58年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 III.
- 北海道教育委員会 1985, 昭和59年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 IV.
- 北海道教育委員会 1986, 昭和60年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 V.
- 北海道教育委員会 1988, 昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 VII.
- 北海道教育委員会 1990, 平成元年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 IX.
- 北海道教育委員会 1991a, 平成2年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査報告書 X.
- 北海道教育委員会 1991b, 平成2年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ IV アイヌのくらしと言葉 2.
- 北海道教育委員会 1992, 平成3年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ V アイヌのくらしと言葉 3.
- 北海道教育委員会 1995, 平成6年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 XIV.
- 北海道開拓記念館 2003, 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第37集.
- 北海道開拓記念館 2011, 小嶋新三・慧子コレクション資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録40.
- 平取町教育委員会 2003, 北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション 国指定重要有形民俗文化財調査報告書.
- 村庄次郎編 1910, 札幌博物館案内, 維新堂.
- N. G. Munro 1962, Ainu: Creed and Cult.

図版出典

- 図1・3: 所蔵機関の許可を得て筆者撮影
 図2・4・5: 筆者作成

Fundamental Study regarding Rope for Tying Dead of the Hokkaido Ainu:

Examining the Relation between Regional Production Technique Differences and the East Line and West Line of Descent Groups Found in the East Hidaka Region

OSAKA Taku

'Rope for Tying Dead' are a category of straps used in funeral rites by the Ainu. Classifying the straps by production technique allows us to consider the relationships between each classification and its descent group. By using the results of this analysis as a foundation to study materials formerly in private collections that are now housed in museums, we are able to further identify fixed estimates of the locations of collection.

Key findings of this analysis are:

- (1) Over 20 distinct types of weaving variations exist among Rope for Tying Dead.
- (2) In the east Hidaka region, 10-string straps (type b) are predominant, with slight co-occurrence with 15-string straps (type a). These correspond with ethnographic accounts which assume that the former were used as *menasunkur*, and the latter were used as *sumunkur*.
- (3) In the Ihuri region, 11-string and 12-string straps are distributed in Chitose, Shiraoi,

and Noboribetsu. This indicates that distribution of 15-string straps (type a) thought to be used as *sumunkur* in the east Hidaka region did not reach as far as the east Ihuri region.

- (4) Binding is known to have been performed during wrapping of the dead even in northern and eastern Hokkaido where few examples have been collected. However, the absence of collected materials is thought to be due to factors such as low population, and the use of items such as cord of indistinguishable purpose, or ad-hoc items such as torn cotton cloth. This may result from configurations that were not well standardized.
- (5) For items held in personal collections in which information regarding the location of collection has been lost, it is in some cases possible to estimate approximate locations of collection by applying the results of this analysis.

